

住民参加型イベントによる風景づくりー愛媛県松野町における取り組みー

愛媛大学大学院 学生会員 ○濱上洋平
愛媛大学大学院 正会員 倉内慎也
愛媛大学大学院 フェロー 柏谷増男

1. はじめに

近年、高齢化、過疎化に伴う担い手不足により、集落の衰退、田畑を中心とする農村風景の崩壊が日本の各地域で深刻な問題となっている。そこで、交流人口を増加させ、地域衰退に歯止めをかけるべく、イベントやワークショップなど様々な活動が実践されている。

本稿では、同様の視点からの取り組みとして、まず愛媛県松野町目黒地区において2006年より実施している風景づくり活動について紹介する。次に、風景づくりの根底は人づくりであるという考えに立脚し、地域の風景を活かした住民参加型イベントが人々の意識変化や人的ネットワークの形成に及ぼす効果を分析する。

2. 風景づくり活動の概要

(1) 対象地域

愛媛県松野町目黒地区は、人口が約400人、小学校の全校生徒が9人という典型的な過疎集落である。年々人口が減少しており、美しい農村風景や集落の維持が困難となることが懸念されている。

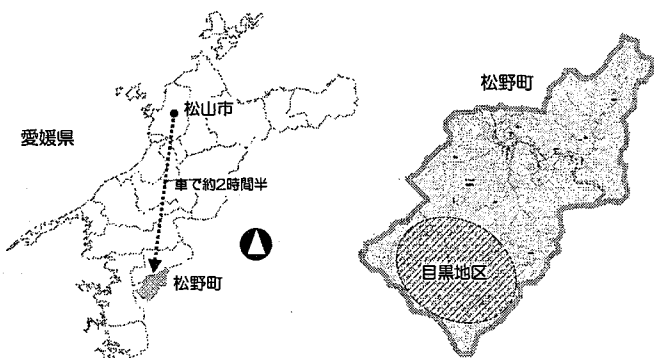


図1 研究対象地域

(2) イベント概要

i) 蛸祭り (2006/6/17)

本イベントでは、地元住民にとっては生活景となっている畦道を灯籠で照らすことによって、普段とは違う視点で風景を捉えてもらう「風景への気づきの場」の創出を目的とし、大学・国土交通省・地域の協働に

より企画した。参加者自身が灯籠を並べ、ライトアップされた畦道において風景歩きを行った。参加者は、地域住民60名、外部参加者140名の計200名であった。

ii) あぜ道コンサート (2006/10/14)

稲刈り後の田んぼの中に舞台を設置し、雄大な自然の中で音楽を楽しみながら風景に接してもらう目的でコンサートを開催した。参加者は、地域住民200名、外部参加者50名の計250名であった。



図2 イベントポスター

3. 分析手法

景観十年、風景百年、風土千年という言葉があるように、風景が作られるまでには長い年月がかかり、風景そのものへの効果を評価することは困難である。そこで、風景づくりの根底は人づくりであるという考えから、人に対する効果の分析を通じて、風景づくりに対する住民参加型イベントの有効性を検証する。

実施したアンケート調査の概要を表1に示す。本データおよび別途実施したヒアリング調査、ならびにPCメールデータを用いて、本研究では、イベントの実施による個人の意識変化、地域個性に対する価値観の共有、人的ネットワークの形成、の3点に着目して分析を行う。

表1 アンケート調査概要

項目	内容
調査実施時期	2007年2月4日～2月23日
調査対象者	イベント参加者(地域住民、イベントスタッフ)
調査方法	配票調査法
調査内容	○個人属性(性別、年齢など) ○蛸の畦道プロジェクトへの参加状況 ○個人の意識変化(参加前を「3」として5段階評価) ○地域個性に対する価値観の共有 ○目黒地区のイメージ(52の選択肢より複数回答)
配布・回収状況	配布数:95部 回収数:59部 回収率:62%
属性	地域住民:29人 イベントスタッフ:30人

